
○ 清水建美著 **カラー自然ガイド、山の植物 I** A 6, 原色48頁, 全 152 頁。1974年4月発行。

本書はキク科・キキョウ科・ウリ科・マツムシソウ科・オミナエシ科・レンブクソウ科・アカネ科・ハエドクソウ科・キツネノマゴ科・イワタバコ科・ハマウツボ科・ゴマノハグサ科・ナス科・シソ科・クマツヅラ科・ムラサキ科・ガガイモ科・リンドウ科・サクラソウ科・イチヤクソウ科・イワウメ科・ミズキ科・セリ科に属する山草 217 種を, 原色図と原色写真で紹介している。解説は簡明で, その中に挿入されている部分図・解剖図とともによく理解を助けている。野外に持参するに軽便である。定価 380 円。保育社。

○ 今堀宏三・田村道夫共著 **系統と進化の生物学** 140頁。1971年9月, 培風館発行。750円。

○ 山崎 敬・福田一郎・椿 啓介・千原光雄・井上 浩共著 **植物系統進化学** 312 頁。1974年2月, 築地書館発行。2950円。

現在の植物が, どのような進化の過程を経て生れて来たものか, また, それら相互は, どのような関係をもっているのか, というような植物の系統進化に関して, わが国では, 従来, 掘り下げた議論がなされていないと言っても過言でない。

すなわち, 今までに, 講義されて来た, いわゆる, 分類学あるいは系統学は, 多くの植物群の形態的特徴の説明で終始していたことから, 他の学科の専攻者からみるときは, 非科学的, または古典的な学問というそしりを受けて来た。

しかし, 「系統と進化の生物学」「植物系統進化学」の著者等は, 新らしく脱皮した“植物分類学”“植物系統学”の現状を紹介することを念願として執筆されたと言われる。

したがって, 上記の二書を一読すれば, 現在の分類学・系統学が, 如何に多くの分野における研究成果をとり入れて, 生物学の総合科学としての様相を呈しているかということがよく理解できるであろう。私は, これらの著者の方々の労を感謝しつつ, 多くの方々によって読まれることをおすすめする。

なお, ハーバード大学のソルブリッヒ氏 (Otto T. SOLBRIG) の Principles and Methods of Biosystematics が, 川崎次男・鈴木昌友・三井邦男の三氏の共訳で広川書店から刊行されている。264 頁。1973年5月発行。2800円。この書も, 同時に読まれるとよいと思う。(金沢大学理学部 里見信生)